

プロフィール

松本健司・・クラリネット(ソロ)

東京都立芸術高校、国立音楽大学を経て1997年にパリ国立高等音楽院クラリネット科を“レオン・ルブラン特別賞”を得て卒業。1998年に同音楽院室内楽科を卒業し、本格的な演奏活動を始め。第6回日本木管コンクール、第4回日本クラリネットコンクール、第22回トゥーロン国際音楽コンクール等で上位入賞後、2002年にNHK交響楽団に入団。現在、首席クラリネット奏者として活躍するほか、洗足学園音楽大学、東京音楽大学、国立音楽大学において後進の指導にあたっている。



阿部真也・・指揮者

幼少よりピアノを、13歳よりヴァイオリンを始める。札幌インターナショナルスクールを経て、17歳で渡米し、サンフランシスコ音楽院ヴァイオリン、ヴィオラ科修了。2005年より拠点をドレスデンに移しオーケストラ奏者・指揮者として研鑽を積み、現在に至る。2006年コルドバ国際指揮者コンクール入賞。2007年よりエドワードサイド音楽院ベツレヘム校ヴァイオリン、ヴィオラ、室内楽科教授に就任。現在は同音楽院客員教授、客演指揮者として籍を置いている。「コバケンとその仲間たちプレミアムオーケストラ」首席奏者など、国内外で客演首席奏者、指揮者を務める他、東京を中心に2007年より「阿部真也と仲間達室内楽シリーズ」を主宰するなど世界中を飛び回る多忙な演奏活動を行っている。

本日の出演者

室内管弦楽団

かまくら シンフォニエッタ



Violin	市瀬雅子 小原治子 高橋けい子 豊田爽子 畑中友季子 丸山寿一	宇多綾子 関 美和子 田仲暁子 中村順子 松野美智子 守本純子	梅原哲郎 曾根民子 戸津隆子 畠中正志 松村紀子
Viola	小原克馬 高久邦子	加藤敬子 三門サカエ	北 直子 水上 清
Cello	射場寛子 中井良樹	尾崎 彩 堀口省平	中井まゆみ 松野義明
Bass	梅沢定彦 松永弘城	建部欣司	柘植みちる
Flute	森口尚美	鷲尾 登	
Oboe	小林晃子	小林隆志	
Clarinet	新居淑子	岩本瑞穂	
Fagott	松木祐子	松木葉子	
Horn	秋元 健	小川 恵	大出佳子
Trumpet	高橋勇太郎	原 育美	
Percuss.	宮部裕美		

代表：松野義明
コンサートミストレス：関 美和子
練習指導：谷口賢記

次回の演奏会は

日時：9月29日(土)

会場：鎌倉駅前生涯学習センター キララホール

かまくら シンフォニエッタ

第18回定期演奏会



F. Schubert
W.A. Mozart
L.v. Beethoven

2018年5月26日(土)

鎌倉芸術館小ホール

後援：鎌倉市・鎌倉合奏連盟



プログラム 曲目解説

F. シューベルト

イタリア風序曲 ニ長調 D.590

シューベルトは、「未完成」交響曲の他、「野バラ」、「鱒」等沢山の歌曲で有名ですが、他にも多くの知られざる名曲があります。この曲のその1つ。

当時のウィーンではバロック以来イタリア音楽が重要な位置を占めていました。代々の皇帝がイタリア音楽を好んだことから、宮廷音楽の主要なポストはほとんどイタリア人作曲家でした。シューベルトも当代随一のイタリアオペラ作曲家で宮廷楽長のサリエリに伝統的な作曲書法を学びます。一方、ナポレオン戦争後、秩序ある良き風俗を維持するためと称して新聞・雑誌はもとより音楽会のプログラムに至るまで検閲が行われ、こうした監視によってどこか閉塞感が漂っていた時代、モダンなロッシェニのオペラが上演され、軽快でエネルギッシュな音楽はたちまち大ブームになります。当時20歳の若いシューベルトは、新旧2つのイタリア音楽の影響を受けてこの曲を作曲しました。

曲は、序曲＋主部＋ストレッタという3つの部分から成っています。序曲はゆったりしたアダージョです。全オーケストラのユニゾンで始まった後、口短調の主題が出てきます。イタリアオペラを思わせるような大変美しい旋律です。主部（アレグロ）に入ると二分の二拍子の明るい曲想になり爽やかに快適に進みます。第三部のストレッタはアレグロ・ヴィヴァーチェということでさらにスピードアップし、力強く全曲が結ばれます。

ちなみに、この曲は、シューベルトの曲が最初に公演された作品です。

（演奏時間は約8分です。）

W.A. モーツァルト

クラリネット協奏曲 イ長調 K.622

この曲は、モーツァルトが亡くなる一カ月前に完成させた曲です。彼が残した協奏曲の中で最後の作品で、深い哀しみと明るさの中にも落ち着いた雰囲気溢れる名曲です。

ウィーン宮廷楽団のクラリネット奏者シュタドラーのために作られたといわれていますが、作曲当時、まだメジャーではなかったクラリネットという楽器に、モーツァルトは新しいものを、感じていたことでしょう。低・中・高それぞれの音域に応じて音色が変わり表現に幅と奥行きがあり、思う存分楽器の魅力を引き出した曲になっています。

第1楽章 アレグロのソナタ形式。第一主題がオーケストラで演奏された後、待ちに待ったクラリネットのソロが入ってきます。メロディがいろんな色に変化し、最後には転調を繰り返し、多彩に表現されています

第2楽章 アダージョ 三部形式。ゆっくりしたテンポのせい、長調なのに深い思いが感じられ、何か語り掛けられているような気がします

第3楽章 ロンド（アレグロ）ロンド形式。このフィナーレは、一転して軽やかなユーモラスな雰囲気が感じられるが、心より明るい旋律はなくクラリネットの独特のかわいらしさの中にどこか寂しく翳りさえ感じてしまいます

（演奏時間は約27分です。）



..... 休憩

L.v. ベートーベン

交響曲第7番 イ長調 Op.92

ベートーヴェンの交響曲の中で第3番「英雄」、第5番「運命」、第6番「田園」、第9番「合唱付」は副題が付されており特に親しまれていますが、この交響曲第7番は副題こそ付されていませんが、多くの音楽家が認める、間違いなくベートーヴェンの代表作として広く支持され、現在でも演奏される機会が多い作品です。

最近ではドラマ版「のだめカンタービレ」で主題曲として使用されるなど、ますます耳にする機会が増えたように思います。

この曲の魅力は、何といたってもリズムにあります。作曲家のリストは「リズムの神化」と呼び、ワーグナーは「舞踏の聖化」と呼んでいます。その他、ディオニソス的な曲と呼ばれることもあります。このディオニソスというのは、ギリシャ神話に出てくる酒の神様の名前で、バツカスとも呼ばれます。この曲は、単純に言うと、盛り上がった酒宴のような音楽といえます（練習の時、指揮者からは「心臓の鼓動を感じて」とよく言われます）。第2楽章はちょっとしみりとした雰囲気になりますが、それ以外は勢い良く一気に曲が流れていきます。

第1楽章 ポコ・ソステヌート・ヴィヴァーチ

第2楽章 アレグレット

第3楽章 スケルツォ プレスト

第4楽章 アレグロ・コン・プリオ

ちなみに演奏時間は第1・3・4楽章のすべての繰り返しを含むと約42分ですが、すべての繰り返しが行われる演奏は少なく、カラヤン（ベルリンフィル）などでは35分を切る演奏もあります。はたして本日の演奏はどちらでしょうか。